

住吉正・○小荒井晃・保田謙太郎
(九州沖縄農研)

【目的】

近年、転作率の拡大や大豆の本作化に伴って、1～2作で水稲作と夏畑作を交互に行う短期水田輪作圃場が多くなっている。このような圃場においては、湛水された水田条件でも排水の良好な畑地の条件でも発生・生育が可能な田畑共通雑草の優占化が懸念される。そこで、現在九州地域において問題となっている田畑共通雑草の種類を明らかにするため、九州各県の水稲作圃場および北部九州の大豆作圃場において田畑共通雑草の発生状況を調査した。

【材料および方法】

1) 水稲作圃場における調査

調査は2007年に、九州全県の主要道路沿いの水田地帯において行った。数筆以上の水稲作圃場が隣接している地区を調査地点として選び、1地点につき8～15筆の圃場における発生雑草種を調査した。また、特定の草種が圃場全体に発生、または部分的に高密度で発生している場合に、多発生として記録した。調査時期は早期水稲、普通期水稲ともに出穂期以降に設定した。

2) 大豆作圃場における調査

調査は2006年および2007年に、北部九州の主要道路沿いの水田地帯において行った。複数の大豆作圃場（転換畑）が隣接している地区を調査地点として選び、

表1 田畑共通雑草の出現頻度(%)

1地点につき2～10筆の圃場における発生雑草種および程度を、水稲作圃場と同様に調査した。調査時期は大豆の成熟期に設定した。	草種	
	水稲作	大豆作
タカサブロウ類	96 (29)	98 (9)
チョウジタデ	56 (10)	57 (0)
クサネム	50 (1)	59 (0)
アゼガヤ	48 (8)	91 (37)
アゼナ類	89 (9)	39 (0)
アメリカセンダングサ	42 (2)	37 (0)
カヤツリグサ	21 (1)	93 (17)
イヌビエ	14 (1)	91 (13)
キシユスズメノヒエ	73 (23)	13 (0)
コヒメビエ	17 (1)	59 (0)
アゼトウガラシ類	46 (5)	20 (0)
ツユクサ	2 (0)	61 (0)
アゼムシロ	44 (0)	13 (0)
ホソバツルノゲイトウ	21 (0)	33 (0)
ヒデリコ	14 (0)	39 (0)
トキンソウ	2 (0)	43 (0)
綿化ヒメミソハギ類	32 (5)	7 (0)
イボクサ	35 (1)	2 (0)

タカサブロウ類はタカサブロウ及びアメリカタカサブロウ、アゼナ類はアゼナ、アメリカアゼナ及びタケアゼナ、アゼトウガラシ類はアゼトウガラシ及びスズメノヒエ、綿化ヒメミソハギ類はナンゴクヒメミソハギ及びホソバヒメミソハギを指す。

数値は出現頻度(%)、()内は多発生地点の割合。

【結果および考察】

水稲作圃場および大豆作圃場において共通して確認された草種は、合計27種類となった。その内、水稲作圃場または大豆作圃場のいずれかで30%以上の出現頻度を示した草種は18種類に上り(表1)、タカサブロウ類、チョウジタデ、クサネム、アゼガヤ、アゼナ類およびアメリカセンダングサは水稲作圃場と大豆作圃場における出現頻度が共に30%を越えた。

水稲作圃場および大豆作圃場の何れにおいても最も発生頻度が高かったタカサブロウ類は九州全域に分布した(図1、図2)。

タカサブロウ類およびアゼガヤでは、水稲作圃場と大豆作圃場の何れにおいても多発生地点が認められ、タカサブロウ類は水稲作圃場、アゼガヤは大豆作圃場で多発生地点が多かった(表1)。

チョウジタデ、アゼナ類およびキシユスズメノヒエでは水稲作圃場でのみ多発生地点が認められ、カヤツリグサおよびイヌビエの多発生地点は大豆作圃場にほぼ限られた。

以上のことから、タカサブロウ類とアゼガヤは九州地域の水稲作圃場と大豆作圃場の何れにおいても最も注意すべき田畑共通雑草であると考えられる。



図1 水稲作圃場におけるタカサブロウ類の発生状況

△早期栽培での発生地点、○普通期栽培での発生地点、●多発生地点

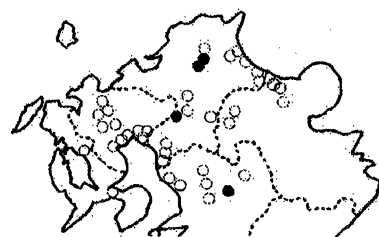


図2 大豆作圃場におけるタカサブロウ類の発生状況

○発生地点、●多発生地点